別　紙　２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　安英姫

本論文「日韓近代小説における小説言説と描写理論――田山花袋、岩野泡鳴、金東仁」は、日本自然主義文学と韓国自然主義文学との関わりを論じたものであるが、分析対象となる作家は主として、日本側では田山花袋（１８７１－１９３０）、岩野泡鳴（１８７３－１９２０）であり、韓国側では金東仁（１９００－１９５１）である。韓国自然主義が日本自然主義の影響を受けたという点についてはすでに指摘もあり、いくつかの先行研究もあるが、安英姫氏は地道で、丹念な調査により、その内実をより明らかにした。その点が本論文の称揚されるべき第一の特長である。以下、そのことを本論文の構成に即して述べる。

本論文は序章「日韓近代文学の関連性」、第１章「「彼」「た」と「一元描写」――『発展』「弱きものの哀しみ」」、第２章「三人称代名詞「He」「She」の日本語・韓国語への翻訳（翻訳語による新たな小説言説）――『毒薬を飲む女』」、第３章「言文一致体と文末詞――『放浪』と「心浅きものよ」」、第４章「語りの視点と内面――「蒲団」『断橋』「ペッタラギ」」、第５章「日韓近代小説の物語世界――『憑き物』「甘藷」」、終章「日韓近代の三人称告白体言説の成立とその展開」とから成る。序章においては日本の近代自然主義小説家がどのようにして三人称告白体小説を作り出したかという問題の重要性がまず指摘される。そのために日本と韓国におけるリアリズムの問題、そのリアリズムと、のちに詳しく議論される泡鳴の一元描写との関係が素描され、さらに金東仁の「一元描写」「人形操縦説」という方法が言及される。

第１章においては、前章で言及された岩野泡鳴と金東仁の一元描写が比較検討される。その際、今日的な観点からその二人の方法論が再検討されるわけだが、分析方法として援用されるのはジェラール・ジュネットやツベタン・トドロフらの理論である。吟味の結果、二人の方法論に関して共通する点は、第１に作者と作中人物の一元化への志向、第２に作品世界が１人の作中人物の視点から描写されること、第３に３人称語りであることが挙げられる。また二人の相違点としては他の描写方法を、泡鳴が全面的に排除しているのに対して、東仁はそれぞれの特長を認めている点である。そうした二人の類似と相違とを確認した上で、実際の作品の描写がどのように作られているかが以後検討される。東仁の作品としては、一元描写を用いて作られた「弱きものの哀しみ」（１９１９）のテクスト分析が行なわれる。

第２章においては、西洋語の He、She がどのようにして日本語表現に取り入れられたかが、田山花袋の「蒲団」、泡鳴の五部作、李光洙（１８９２－？）の「無情」、東仁の「弱き物の哀しみ」、廉想渉（１８９７－１９６３）の「初期三部作」を使って論じられる。その際、注目されるのが西洋語三人称代名詞の持つ前方照応性と置換可能性の問題である。日本語、韓国語において、西洋語三人称代名詞の翻訳語としての「彼」「彼女」「Kue」「Keunyeo」がいつ使われる始めるようになったかということはこれまで一応調査されてきたが、それらが実際どのような原則に基づいて日韓文学テクスト中で使われているかが綿密に分析されたとは言い難かった。安氏はそれを上記の作品内の使用法を詳しく検討して、明らかにした。

第３章においては、日韓文学テクストの文末詞の問題が分析される。明治期における言文一致運動において文章をどのように結べば良いかは作家の苦労するところであった。その議論に一応の終止符が打たれ、近代日本語文体が完成した後でも、ル形、タ形を混在した形で文章を書くか、それともどちらかに統一した形で文章を作るかについて作家は苦労しなければならなかった。泡鳴の五部作はそのことを明らかに示している。五部作を構成する作品のうちで最初に発表されたのは『放浪』（１９１０）であるが、その作品群はその後一元描写の方法に従って改稿され１９１９年に改訂版として刊行された。その改稿の過程を安氏は丹念に分析し、どのようにテクストが変化したかを網羅的に明らかにした。そこで問題になるのが、どこでどのような視点から内的焦点化が起こっているかという点と、文末詞がどのように変化したかという点である。また韓国側のテクストとしては東仁の「弱きものの哀しみ」「心浅きものよ」（１９１９）が取り上げられ、それらのテクストが詳細に分析される。そのことにより、東仁の韓国近代文体形成上の貢献が確認される。

第４章においては、語りの視点と内面という観点から日韓の文学テクストが分析される。ここで使用される文学テクストは花袋の「蒲団」、泡鳴の『断橋』、東仁の「ペッタラギ」である。「蒲団」に関する分析では、その作品内における内的焦点化がどこで起こっているかが分析され、その作品が必ずしも主人公、竹中時雄の視点からのみ書かれているわけでないことが確認される。またこの作品内では手紙という表現手段が使われ、それにより竹中時雄の「女弟子」横山芳子の声も聞く事ができるのである。それに対して、泡鳴の五部作では視点は主人公、義雄に固定され、徹底的に義雄の内面が、そして義雄の眼を通して感得される外界世界が描かれる。その結果、「蒲団」は「男」の物語であると同時に「女」の物語でもあるのに対して、五部作は一貫して「男」の物語であり続ける。他方、東仁は「ペッタラギ」（１９２１）でそれまで行なってきた一元描写から離れ、枠組み小説という構造と異なる語りの形式とを用いることで新たな文学世界を近代韓国文学にもたらした。

第５章においては、五部作と東仁の「甘藷」が分析され、特にその社会的コンテクストが議論される。五部作において伊藤博文の「暗殺」が言及されているが、表現の多く

が主人公義雄の行動と内面とに置かれているため、テクストの示す社会的ひろがりは乏しい。それに対して東仁の「甘藷」では福女という「下層階級」の女性が殺されるという個人の悲劇を描いてはいるが、そこに一個人の悲劇を超えた植民地下での民族的貧困の問題が暗示されてもいる。「甘藷」の改稿過程を調べると、そこで東仁が客観描写の様相を強めていることが分かる。泡鳴の一元描写を学び、近代的韓国短編小説を作り出した東仁はここで新たな展開を見せたのであった。その変容については安氏が東仁の短編すべてをいくつかの指標に基づいて分類してみせたことでより明らかになった。

終章において、以上の議論をふまえ、安氏は近代日韓文学における三人称告白体言説の成立とその関係、またその相違をまとめるのである。

以上、述べたように、本論文は近代日韓自然主義文学における影響関係を、その内実に即して明らかにしたものである。その際、それぞれの作品の初出、初版にあたり、その改稿過程を調べ、表現がいかに変容し、その結果、どのような文学的効果が生み出されたかを確認したところに本論文の特色があると言えよう。

もちろん、本論文にも欠点が無いわけではない。題名から推測できるように、近代文学と内面告白との関係などは柄谷行人氏の枠組みにおおく頼っている。また文学理論の面ではさらに多くの理論を参照する必要があることも指摘された。韓国語テクストの日本語訳も誤訳を無くし、さらに推敲する必要があるとも指摘された。しかし、そうした指摘も今回、安氏が行なった地道で丹念な資料調査、テクスト分析から導き出された研究成果の意義を減じるものではなかった。この主題についてさらなる資料調査が必要であるにしても、今回の安氏の調査で多くのことが明らかになったということは審査委員の一致した見解であった。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。